

驪山の温泉に關する文學

神田喜一郎

支那の温泉といへば、何人も直に驪山の温泉を思ひ浮ぶを常とす。實に此の温泉こそ彼の唐の玄宗皇帝と楊貴妃との美しき情話の第一齣の幕の切り落されし場所なり。白樂天の長恨歌に其の時の有様を詠みし

春寒賜浴華清池。温泉水滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力。恰是初愛恩澤一時。

といへるは、固り人口に膾炙せる所、華清の池とは、即ち驪山の温泉に外ならず。而して驪山の温泉は、これ以來長へに其の浮名を世に流すことゝはなりしなり。されば驪山の温泉に關する文學の大半は、殆ど詠史懷古の作に限られたるが、或は玄宗と貴妃との情話によりて、特に驪山の温泉に多くの文學的作品が残されたりといふが適當なるやも知らず。總じて支那にては

我が國の如く温泉の至る所に湧き出づることなれば、單に温泉の景物を寫し情調を詠みたる詩文は、其の數頗る乏し。

抑も驪山の温泉は支那の温泉の隨一なり。其の地は固り長安の古都に近く、自ら夙く世に顯はれしことは疑なし。何れの温泉にも其の由來に就いては秘しき説話の傳へらるゝが常なるが驪山の温泉も亦その例に漏れず。水經注太平御覽等の書に引ける辛氏三秦記といふを見るに、此の温泉を以て秦の始皇帝の時に始めて湧き出でしものとなせり。其の説に云ふ、嘗て始皇帝が此の驪山に遊びて神女に戯れしが、神女は其の非禮を怒りて唾をはきかけたるに、忽ち始皇帝の身に瘡を生じたり。始皇帝、乃ち大に怖れて、深く神女に罪を謝したるに、神女は此の温

泉を湧き出さしめて、始皇帝の瘡を洗滌したりと。こは固り一の説話たるに過ぎざれど、秦の始皇帝が其の三十五年に始めて驪山に宮殿を營みしといふ事實と合せ考ふれば、或は此の温泉の湧き出づることは始皇帝の頃よりして世に知らるゝに至りしかとも思はる。然しそは何れにしても漢代以後の書には往々驪山の温泉のこと散見したり。而して驪山の温泉に關する文學の第一に現はるゝは張衡の温泉賦なりとす。その全文次の如し。

温泉賦并序

陽春之月。百草萋萋。余在遠行。願望有懷。遂適驪山。觀溫泉。浴神井。風中轡。壯厥類之獨美。思在化之所原。感洪澤之普施。乃爲賦云。

覽中城之珍怪。無斯水之神靈。控湯谷於瀛洲兮。濯日月乎中營。蔭高山之北垠。處幽屏以閒清。於是殊方跋涉。駿奔來臻。士女障其鱗。華紛雜沓其如烟。亂曰。天地之德莫若生兮。帝育蒸民。懿厥成兮。六

氣淫錯有疾癘兮。溫泉汨焉以流穢兮。蠲除苛慝服中正兮。熙哉帝載保性命兮。

張衡は彼の兩京の賦を以て、其の才華の班固に追隨するを許されし者、其の手筆になりし此の賦が驪山の温泉に關する最古の文學的作品として現存するは、また驪山の神女をして聞かしむるも敢て不滿は無かるべし。この賦中に「殊方跋涉、駿奔來臻。云々」とあるは、後漢の頃よりして、既に諸方より千里を遠しとせず湯治に來る者の多かりしを證すべし。張衡の後同じく賦家として文名を馳せたる晋の左太冲は、其の有名なる魏都賦の中に、亦た驪山の温泉を詠みて、

溫泉怒涌而自浪。華清蕩邪而難老。

と云へるが、僅に二句のことなれば、別に取立て言ふべき程のことなし。次いで北周の庾信と王褒との二人に各々温湯碑と題する文あり。流石に作者が作者だけに、共に駢儷の能事を盡くし、殊に庾信のものは面白けれども、其の文長くして茲に全文を録するに堪えざるは遺憾なり

但だ其の文中に

仲春則榆莢同流。三月則桃花共下、其色變者。

流爲三五雲之漿。其味美者。結爲三危之露。

煙青於銅

浦。色白

於鉛溪。非

神鼎而長

沸。異龍池

而獨涌。

といへるが如

き、其の靈筆

の圓轉自在な

るに驚かし

む。或は云ふ、

庾信の文は是

れ彼が弘農の

郡守たりし時

の作に係ると。

名なり。

弘農は即ち驪温泉の所在地の古

唐代に至りて驪山の温泉の名は大に顯る。始

驪山の温泉は關する文學

め唐の太宗は、此の地に温泉宮を營みて時々此處に巡幸したるが、太宗に温泉銘の作あり、自ら筆を揮ひて、之を碑石に刻したり。然るに其



唐太宗御筆溫泉宮銘
(煥煙莫高窟出土)

の碑石は
夙に亡佚
して、從
來全く世
に知られ
ざりしが
近年佛國
のペリオ
教授が敦
煌の石室
より其の
拓本と推
定せらる
ゝものを

發見し、大に世の書法に心を寄する者を喜ばし
たり。茲に寫眞にて示せるは其の一部分なりと
す。若し其の文章の善、書法の美に至りては敢

て想説するまでもなし。但だ現存する所、僅に四十八行に過ぎずして、全文の知り得ざるを憾むのみ。

太宗の後、安史の亂の起るまでは、唐の歷代の天子、屢々此の驪山の溫泉宮に巡幸したるが如し。殊に玄宗は驪山の景物を愛し、天寶六載從來の溫泉宮を増築して名を華清宮と改め、毎年十月、此處に幸し、翌年の春に至りて帝都に還御するを例と爲せしといふ。されば唐初の臺閣の諸公には、多く鳳駕に扈從して驪山の溫泉に遊びし詩を傳へたるが、其の中、天子の命によりて作りし所謂應制の作も尠からず。茲に其の一二を例示すべし。

奉_レ和_二聖製過_二溫泉_一 鄭義真

洛川方駐蹕。豐野暫停轡。湯泉恆獨涌。溫谷豈知寒。漏鼓依巖畔。相風出樹端。嶺烟遙聚草。山月廻臨鞍。日用誠多幸。天文遂仰觀。

奉_レ和_二溫泉言_二志應制_一 張說

溫泉媚新豐。驪山橫半空。湯池薰水殿。

翠木暖_二烟宮_一。起_レ疾逾_二仙藥_一。無和合_二聖功_一。始知堯舜德。心與萬人同。但だかゝる臺閣體の詩は、何人の手に出づるとも、其の命意、多くは千篇一律たるを免れず、張説の大手筆を以てして猶こゝに示すが如きの出来榮えなり。他は敢て列舉するの要無からん。

安史の亂、漁陽の烽火が一度歡樂の夢を破りて後、驪山の溫泉は、復た翠華の幸するなく、徒らに詩人が詠史懷古の好題材とのみなりて、從來の臺閣體の詩は固り張衡の賦、庾信の碑の如きの作品をも見るこゝとなし。予はそれら汗牛充棟の詠史懷古の作の中、尤も王建の溫泉宮と題する七古を喜む。其の詩に云く、

十月一日天子來。青繩御路無塵埃。宮前內裏湯各別。每個白玉芙蓉開。朝元門向山上起。城繞青山龍暖水。夜開金殿看三星河。宮女知_レ更月明裏。武皇得_レ仙王母去。山鷄畫鳴宮中樹。溫泉泱泱出宮流。宮使年年修_二玉樓_一。禁兵去盡無_二射獵_一。日西麋鹿登_二城

頭。梨園弟子。曲譜。頭白人間教歌舞。

この作者王建は宮詞の作に於て古今の名手と推
さる者、此の種の詩は彼が絶技の境場と稱す
べし。彼には又華清宮と題する絶句あり、努め
て空宮淒涼の狀を寫せり。云ふ

行盡江南數十程。曉風殘月入華清。朝元閣
上西風急。都入長楊作雨聲。

と、是れ蓋し三體詩の劈頭に載録せられて、今
日兒童の猶ほ能く諷誦する所、短篇といへども
其の神理は前の溫泉宮と題する古詩と相同じ。
別に華清宮の懷古の詩にて予の愛誦措かざるも
のに杜牧の五古あり。その詩三十韻を重ね、頗
る長篇なれば茲には割愛せんも、

歌吹千秋節。樓臺八月涼。神仙高縹緲。環佩
碎丁當。泉暖涵臈鏡。雲嬌惹粉囊。嫩嵐滋翠
葆。清渭照紅妝。帖泰生靈壽。歡娛歲月長。

月聞仙曲調。霓作舞衣裳。とて、極力開元の天子が盛事を叙し、更に一轉
して、

喧呼馬嵬血。零落羽林槍。傾國留無路。還

魂怨有香。蜀峰橫慘澹。秦樹遠微茫。とて、安史の亂の慘禍に入り、最後に及んで亂
後の荒涼を述べ、

碧簫將送日。殷葉半雕霜。迸水傾瑤砌。
疏風罅玉房。塵埃羯鼓索。片段荔枝筐。鳥
啄摧寒木。蠅延蠹畫梁。孤煙知客恨。遙
起泰陵傍。

と結びし手際は、真に一唱三嘆の妙あり。予は
此の作を以て、私かに驪山の溫泉に關する詠史
懷古の作の壓卷に推さんとするなり。

其の他、唐人の作、風調の佳なるものに乏し
からず。茲に三四を抄出すべし。

華清宮三首

崔櫓

草遮回磴絕鳴鑾。雲樹森森碧殿寒。明月
自來還自去。更無人倚玉欄干。

障掩金鷄蓄禍機。翠華西拂蜀雲飛。珠
簾一閉朝元閣。不見人歸見燕歸。

門橫金鎖悄無人。落日秋聲渭水濱。紅葉
下。山寒寂寂。濕雲如夢雨如塵。

秋日過驪山

孟遲

冷日微烟渭水愁。華清宮樹不勝秋。霓裳一曲
千門鎖。白盡梨園弟子頭。

但此の詠史懷古の作も、大抵は様に依つて胡
蘆を畫くを免れず。元明清の諸家の集、此の種
の作を見ることが殆ど枚舉に遑あらざれど、復た
特に出色のもの無きを如何んせん。却て王建に
又た華清宮と題する絶句あり、云ふ

酒幔高樓一百家。宮前楊柳寺前花。內園分
得溫湯水。二月中旬已進瓜。

と。齋藤拙堂は此の詩を絶句類選に收めて

「天民老人嘗爲予云。嘗坐上州伊香溫泉。見
瓜熟詢之。土人謂予引溫泉灌漑。知王建
詩不妄。」と云へるが、以て彼我溫泉地の風俗

の相似たるあるを證すべく、普通の詠史懷古の
凡作を讀むよりは興味萬倍せり。

顧ふに驪山の溫泉に關する文學、大抵上に述
ぶる所に盡く。若し更に之を詞曲小説の類に求
めば、或は猶ほ意外の收獲あるやを保し難きも
予は僅に長生殿傳奇の外には知る所なし。即ち
長生殿傳奇に寢浴と題する一齣あり、玄宗と楊
貴妃とが相擁して驪山の溫泉に入浴せし所を、
侍側の宮女が竊かに隙見する場面なり。其の入
神の妙筆は一讀能く人をして恍惚魂銷せしむ。
蓋し驪山の溫泉に關する文學として、最も濃艶
の情趣に富めるものとす。

臨潼華清宮溫泉作

六首

鈴木豹軒

既有棲鴉噪白楊。

驪山秋色晚蒼茫。

降車僅罷臨潼縣。

先訪玉環供奉湯。

山下亭園秋柳黃。

雙池南面室中央。

玉甃金甃零落盡。

道是唐朝貴妃湯。

碧嶂嵯峨渭水濱。

千門想像翠華春。

于今山下溫泉滑。

不洗凝脂洗旅塵。

東向河南第一程。

微風纖月入華清。

牆邊敗葉蕭々響。

猶似當時私語聲。